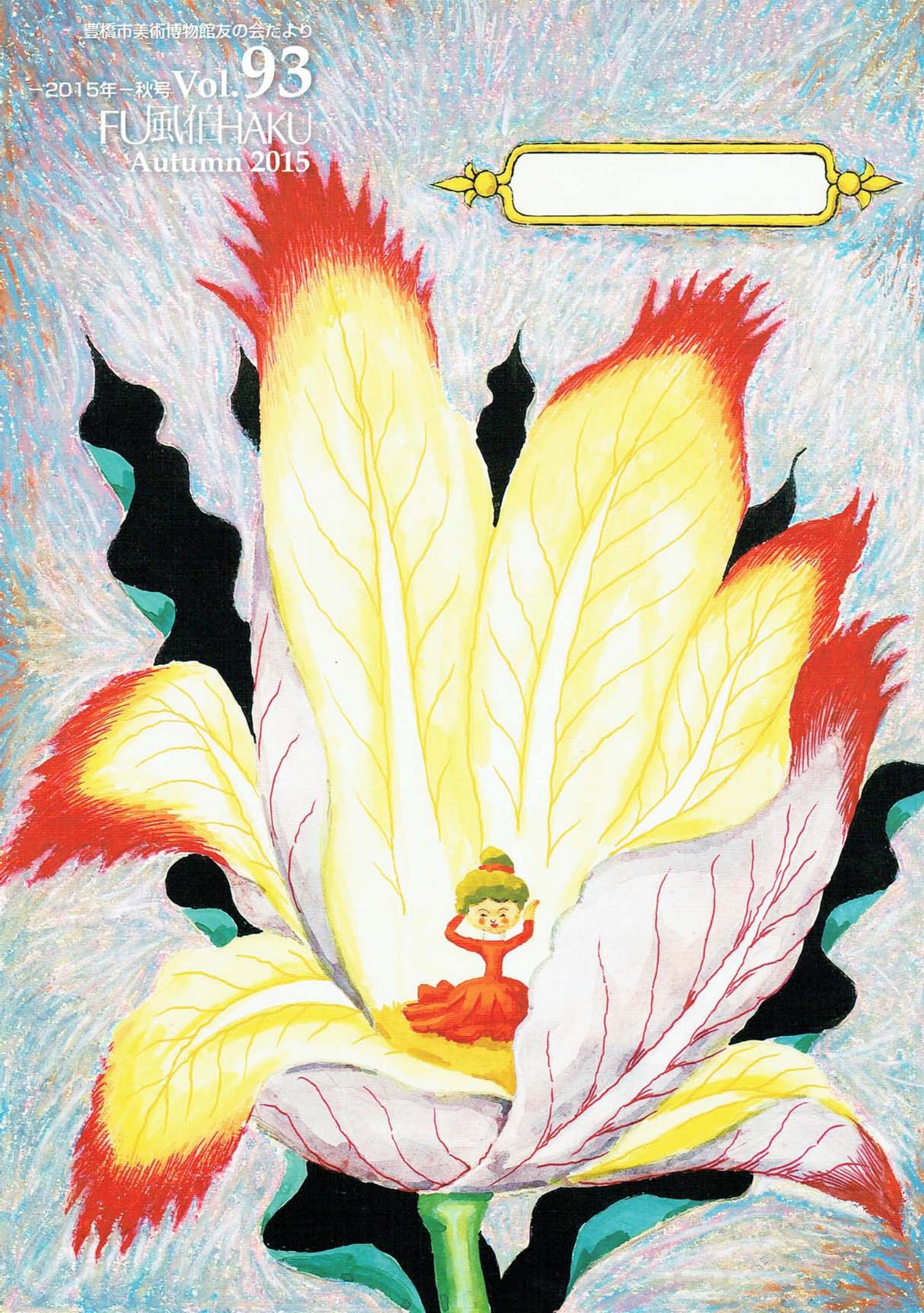


豊橋市美術博物館友の会だより

2015年秋号 Vol.93

FU風伯HAKU
Autumn 2015



展覧会紹介

生誕120年

武井武雄の世界展 ~子どもの国の魔法使い~

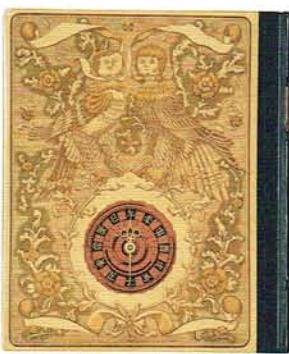
11月23日(月・祝)まで 月曜日休館(11月23日は開館) 豊橋市美術博物館 2階展示室

「武井武雄の世界展」では、長野県生まれの武井武雄の作品約400点を紹介しています。

武井の画業で筆頭に挙げられるのが「童画」分野ですが、手がけたのは童画のみにとどまりません。本展は「童画」「版画」「刊本作品」「コレクター」「蔵書票やミニアチュール、陶印など身の回りにある小さなもの」「デザイナー」など、多岐にわたるしごとを見わたすことができる内容です。



《『コドモノクニ』創刊号》1922年

《銅版絵本『地上の祭』》
1938年**●童画**

武井が童画家となったきっかけは意外なものでした。小学生のころから絵描きになることを公言し、反対する父親を説得して上京、本郷洋画研究所（岡田三郎助に学ぶ）から東京美術学校へ進んで油絵と銅版画を学び、画家になる道を模索していました。そんななか、生活の糧を得るために児童雑誌『子供之友』などに絵を描くようになります。時は大正中期、子ども向けの雑誌『赤い鳥』『金の船』（後の『金の星』）が続々と発刊され、児童文化の花開いた時代でした。アルバイトとして取り組むなかで、武井はこのしごとの重要性に気付き、一生をかけて取り組む決意を固めます。

●版画作品

「一度で良いから遺憾のない本作りをしてみたい」との武井の希望にアオイ書房の志茂太郎が応える形で企画された銅版絵本『地上の祭』は、構想から3年の月日を経て出版までこぎつけました。人生を12の詩とエッティングで表現しています。刷りを手がけたのは当時

武井武雄 (1894-1983)

長野県諏訪郡平野村（現・岡谷市）西堀に生まれる。東京美術学校西洋画科卒業。1921年から絵雑誌『子供之友』その他に子ども向きの絵を描きはじめる。1925年に銀座資生堂画廊で開いた初個展で「童画」のことばを初めて用いる。「子どもの心にふれる絵」の創造を目指し、大正から昭和にかけて、童画をはじめ版画、刊本作品、玩具、ミニアチュールなど多方面でその才能を發揮した。

青森在住の関野準一郎でした。

●刊本作品

武井のライフワークと呼べるしごとです。生涯で刊行した139冊のなかから、本展では61冊を紹介。武井は物語を書くとともにさし絵を描き、素材を熟知した職人を探し出して依頼まで行います。通常の書籍では用いられない素材（寄せ木・ステンドグラス・パピルスなど）にも果敢に挑戦しました。作品によっては刊行まで数年を要することもありました。

●豊橋会場特別出品

本展は、武井の生誕120年を記念して開催する全国巡回展で、8会場目となる当館が最終会場ですが、豊橋でしか見ることのできない作品があります。市内在住の個人コレクターより借用したかるたです。特にお勧めしたいのが1937年に発行された「漫画かるた 赤ノッポ青ノッポ」です。「赤ノッポ青ノッポ」は、戦前に朝日新聞に連載され、後に単行本化されました。桃太郎の子孫・今野桃太郎の招待に応じて日本にやって来小学校に通う彼らは、顔は少し怖いですが、心やさし



《螢の塔で》撮影年不詳

《刊本作品No.55『ラムラム王』》1964年：正式な名前を「ファンヌエスト・ガーマネスト・エコエコ・ズンダラー・ラムラム王」といい、1924年に児童雑誌『金の星』に一話完結の物語として掲載されたのが初出です。フランス語の頭文字(Roi Ram Ram)「RRR」のサインを1938年まで使いました。

※掲載作品は全てイルフ童画館蔵

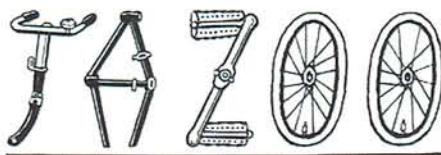
展覧会紹介

い性格です。慣れない環境で鬼たちが引き起こす珍事件の数々に思わず笑みがこぼれます。かるたでは、お正月の準備に勤しむ様子が川柳で綴られています。

(学芸員 細田樹里)



《赤ノッポ青ノッポ》表紙・裏表紙 1948年



「JAZOO MANIA」ロゴ 制作年不詳



《空のむこう》1964年



《ことりのくに》1955年

収蔵品展 「Color Rooms」

平成28年1月5日(火)～2月21日(日) 月曜日休館 豊橋市美術博物館

2階展示室

緑、黄、青、赤、白…それぞれの色にどのようなイメージを抱いていますか？国ごと、地域ごとの伝統や慣習、宗教などが定める象徴の色があるほか、個人の体験や記憶、感覚と結びつくことで、色には多様なイメージが託されます。状況に応じてひとつの色に真逆の印象を持つこともあるでしょう。さらに、それぞれの色には混色や濃淡などにより無限のバリエーションが生じますが、わずかな追加減によって抱くイメージもゆらぐ結果となります。

平成25年度の収蔵品展では「墨」(モノクローム)による近世～近現代の作品を紹介いたしましたが、このたびは「色」をテーマに企画いたします。色彩は絵画を構成する重要な要素ですが、画家たちは豊富な色彩を用いるばかりでなく、作家の好みの色調や時代の色というものもあり、また色彩による視覚効果を狙った表現もあります。

ここでは基本的な色彩をもとに部屋を構成し、各色を基調とする絵画と陶磁器を集めます。時代や様式、ジャンルを越えて、色を基準に構成することで、それぞれの作家が色彩に託したイメージの差異や表現や質感の多様性に注目します。

これまでの美術鑑賞とは少し視点を変え、色彩を味わう体験をお楽しみください。(主任 学芸員 丸地加奈子)

■ボランティア・ガイドによるギャラリートーク／1月13日～2月21日の水・木・土・日

午後1時30分～・2時30分～

■学芸員によるスライドレクチャー／2月6日(土) 午後2時～ 於 講義室



大野俊嵩《RED NO.23》1963年

展覧会紹介

本陣に泊まった大名たちⅡ**– 讃岐高松藩松平家と阿波徳島藩蜂須賀家 –**

開催中～11月15日(日) 月曜日休館 豊橋市二川宿本陣資料館

二川宿の本陣は、文化4年(1807)から明治3年(1870)まで馬場家が勤め、大名や幕府役人、公家などが宿泊・休憩に利用しました。これらの利用状況を記録した「二川宿本陣宿帳」が、文化4年から慶応2年(1866)まで60年分残されており、当時の様子を詳しく知ることができます。利用者は、参勤交代で江戸と国元を往来する西日本の大名が目立ちますが、全国から本陣の利用がありました。



みとものつら絵巻 月巻（部分）徳島県立博物館蔵

忠臣蔵浮世絵展12月5日(土)～1月17日(日) 月曜日休館 (ただし1月11日は開館し、12月29日、30日、31日、1月1日、12日は休館)
豊橋市二川宿本陣資料館

元禄14年(1701)3月江戸城松の廊下で赤穂藩主・浅野内匠頭が高家肝煎・吉良上野介へ斬りかかったことにはじまり、浅野の切腹、お家断絶。翌15年12月14日の義士たちの仇討から切腹にいたる歴史上の事件が「赤穂事件」です。この事件は、人形浄瑠璃や歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」として上演され、江戸時代から現代に至るまで親しまれてきました。



忠臣蔵見立人形

当時の流行を写し取るメディアであった浮世絵にも、忠臣蔵の物語はさまざまな形で取り上げられ、数多くの絵師により描かれました。役者絵のみならず、美人画や武者絵、戯画など役者絵以外のバラエティーに富んだジャンルでも、忠臣蔵は画題として採用されました。これら

この展覧会では、二川宿の本陣を利用した四国の大名たちの中から、特に利用回数の多かった讃岐の高松藩松平家と阿波の徳島藩蜂須賀家を取り上げます。四国の大名の参勤交代における一番の特徴は船団で瀬戸内海を渡ることです。船団を描いた屏風や航路図、船で使用された筆筒などを展示し、四国の大名ならではの参勤交代の様子や、本陣を利用した大名を紹介します。
(学芸員 久住祐一郎)



徳島藩参勤交代渡海図屏風（右隻）蓮花寺蔵

は、多様な需要に応え供給されていたといえましょう。

本展覧会では、さまざまなシリーズの忠臣蔵浮世絵を展示し、日本人の心性に迫る物語を紹介します。

(主任学芸員 和田 実)



義士仇討之図



大星由良之助、大星力弥、大鷲文吾

商家「駒屋」一般公開しました

この度、豊橋市指定有形文化財である商家「駒屋」の改修復原工事が完了し、11月1日より一般公開しました。

商家「駒屋」は、旧東海道二川宿で米穀商・質屋を営むかたわら、問屋役や名主などの宿村役人を勤めた田村家の遺構です。江戸時代から大正時代にかけて建てられた主屋・離れ座敷・脇門・茶室・南土蔵・中土蔵・北土蔵・北倉の8棟の建物からなり、宿場町の商家の



駒屋外観



主屋 板の間

商家「駒屋」の催し

◆鈴木愛デザイン書道展

日時／11月19日(木)～12月16日(水) 9:30～16:15

観覧料／無料

◆二川の笑み、宿場の笑い—落語のしぐさ—

日時／11月21日(土) 14:30～15:30

定員／35人 参加料／700円

◆寺子屋駒や—鈴木愛デザイン書道講座—

日時／11月28日(土) 10:00～12:00、13:30～15:30

定員／各15人 参加料／2,650円

◆寺子屋駒や—伝統工芸品 豊橋筆 実演・販売—

日時／11月28日(土) 10:00～

参加料／無料

一般的な形式を良く残しています。

今後、商家「駒屋」は、二川宿の歴史と文化の継承発展の場、二川宿の地域資源を全国に発信する場、地域住民や二川宿を訪れた方々の交流の場として活用されます。また、今回の商家「駒屋」の一般公開により、二川宿は本陣・旅籠屋・商家の3か所を見学できる日本で唯一の宿場町となりました。

(学芸員 久住祐一郎)



離れ座敷



中庭

◆駒やクリスマス～天使の竖琴～ライアーコンサート

日時／12月12日(土) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30

定員／①②各30人 (12月1日から受付、申込順)

参加料／2,000円

◆二川の笑み、宿場の笑い—二川寄席—

日時／12月19日(土) 14:00～15:30

定員／35人 (12月1日から受付、申込順)

参加料／300円

◆寺子屋駒や—幸運を呼ぶ注連飾り 伊勢海老の巻—

日時／12月20日(日) 14:00～15:30

定員／15人 (12月1日から受付、申込順)

参加料／500円

●お問合せ・申込み 商家「駒屋」(豊橋市二川町字新橋町21 ☎0532-41-6065)

秋の研修旅行記

「古美術評論家・青柳恵介先生とめぐる旅 第2弾 京都・南山城の古寺巡礼」(10月19日～20日)の参加者から届いた旅行記をご紹介します。

念願の大和路歩きが実現

第一日目のバスの中で「最初の岩船寺から淨瑠璃寺まで、山道を一時間以上歩きます」と、突如告げられた。

一昨年の「近江の寺旅」で古美術評論家・青柳恵介先生の名解説付きの旅に参加し、すっかり古寺巡りファンとなった私も思わずエッ！？長歩きは苦手なのだ。

とはいっても、当尾の石文化を表す伊派の石仏をいくつも見ながら山道を下れば、絶好の青天下で、かねて願いつつも叶わなかった大和路歩きがいま実現している。それも同好の集いとなれば何と楽しいことか。柿よ、花よ、と言い合ううちに憧れの淨瑠璃寺へ到着した。

本堂の大きな九体の阿弥陀如来像は国宝で、真ん中はひときわ大きな仏様だが、想像していた違和感はなく、堂内で実際にしっかりと坐していらっしゃる。美女ぶりで有名な吉祥天女像は小さな御厨子の中に納められ、写真よりも優しいお顔立ちであった。

ご住職の仏像説明が深い法話風になった。一同が聴き入っていると、「人間は下の下から上の上まで九段、ピンからキリまである。この九体の仏様はそれぞれを救って

仏様からのメッセージ

古寺巡礼二日目。前日同様の快晴。

のどかな村を歩いた先の神童寺の平安期の仏様達は、とても穏やかな表情でした。撞かせていただいた鐘の音がまだ耳に残っています。蟹満寺の小さなお堂の大きな釈迦如来坐像にはびっくり。蟹の恩返し説話にはほっこり。観音寺の国宝十一面觀音立像は想像以上の美しさにうっとりするばかりでした。



一休寺

酬恩庵一休寺は境内の隅々まで手入れの行き届いた禅寺。この旅行の目玉のひとつ精進料理は期待を裏切らず堪能しました。一休さんは天皇の皇子というこ

福井浩子 (864)

下さる。全部押めば心配なし」とお話しになり、ドッと笑いが起こった。洒脱なユーモアが続き、堂内が和んだ。庭園はおっとりと美しく、現世の極楽浄土にも思われた。

海住山寺を拝観のあと、麓の恭仁京跡へ。広々と気持ちのよい公園になっており、礎石に腰を下ろせば純朴な万葉びとの気分になった。ご同行の青柳先生はそれを教えて下さりたかったのかも知れない。



淨瑠璃寺

久曾神真喜 (541)

とで廟（お墓）には菊の御紋。お墓を目にすると歴史上の人物が現実の人に思えてきます。

鈴なりの柿が印象に残る禪定寺。本堂脇の収蔵庫には平安期の堂々とした仏様達が、ふくらしたお顔の十一面觀音立像を護るように並んでいました。

以上が二日目の行程でした。この二日間で数えきれない程の仏様に出会いました。それぞれの仏様がお姿を通してその時代を、そして人々の心を伝えて下さいました。そのまなざしを思い出しながら、私はまだ余韻に浸っています。



岩船寺から淨瑠璃寺までの道中

「はじめまして よろしく！」 新理事紹介

金田千波（95）



私が子供の頃は、どこの家にも百科事典が飾られていました。私はその別冊の『世界美術全集』が何故かお気に入りで、薄暗い部屋で個性あふれる絵や彫刻を眺めることが好きでした。絵やデザインが得意であったり、興味があったりした訳でもなく、ただ単に好きだったのです。

大きくなって美術館や博物館に行けるようになると、「これがあの名作か！」と本物に出会った感激に

浸りました。大きな作品に息を呑んだり、思ったよりずっと小さな作品には顔を近づけたり。絵を見ているときは、知的な興奮と喜びが感じられる幸せな瞬間です。絵画鑑賞にきまりはないでしょうが、より楽しむためには最低限の知識は必要かもしれません。その点、諸先輩方の豊富な知識とたゆまぬ探究心には圧倒されます。

今回のご縁を大切に、時間をかけて試行錯誤しながらより楽しい時間を増やしていけたらと思っています。よろしくお願ひいたします。

美術サロン報告

連続講座 「印象派を超えた画家たち」 第2回 ゴーギャン

神野志保子（507）

講座はまず、生い立ちから始まる。ゴーギャンは、ペルー副国王である大叔父の特權的生活と祖母の社会主義思想という矛盾に満ちた環境で幼少期を過ごした。フランス帰国後、航海士になり世界周遊、さらに株式仲買人として成功を収める。30代半ば、富・名声・家庭のすべてを捨てて画家を目指すが、そんな彼を待っていたのは周囲の無理解と生活苦。

デンマーク、パナマ、マルティニック島、パリと転々とする中で初期の印象派的傾向から脱却。ブルターニュの人々の素朴さや神秘性、当時流行していた日本版画の影響などを受けて画風が変化。色彩の諧調、遠近法の否定、しっかり描いた輪郭線の中に絵具をべったり塗るといった特徴的スタイルを確立するまでが、作

品画像にあわせて解説される。

脱印象派の動きとしては、ベルナールとともに、テーマ性、画家の内的イメージ、色彩や線への美意識の総合を目指す“総合主義”的理念を打ち立てた。

実生活では貧困と病苦、ゴッホの自殺や娘の死の知らせなど不幸が続き、失意のうちにタヒチで描いたのが代表作の『我々はどこから來るのか。我々は何者なのか。我々はどこへ行くのか』。

一時期共同生活を送ったゴッホとゴーギャン。絵画に宗教性を託したゴッホに対し、装飾絵画の創始者であり抽象画の先駆者でもあった放浪の人・ゴーギャン。人生と作品に興味の尽きない講座だった。

「好きな絵をさがそう」 実施しました！

10月17日（土）、18日（日）の両日、豊橋まつりの開催にあわせ、友の会主催の催し「好きな絵をさがそう」を実施しました。好天のもと、理事の方々が豊橋



作品を選ぶ子どもたち

公園に来た子どもたちにアンケート用紙を配布し、館内を巡って好きな作品を選んでもらいました。

アンケートの結果、《ことりのくに》（3頁参照）が一番人気でした。

子どもたちに美術博物館に親しんでもらい、美術に触れていただくよい機会となったようです。

■アンケート結果（290人）

〈好きな作品 ベスト5〉

- ①ことりのくに 33票（11.4%）
- ②イソップモノガタリ 23票（8.0%）
- ③おやゆびひめ 22票（7.6%）
- ④あおいどうわのくに・アラジンのランプ ともに18票（6.2%）
- ⑤美術博物館に来た回数

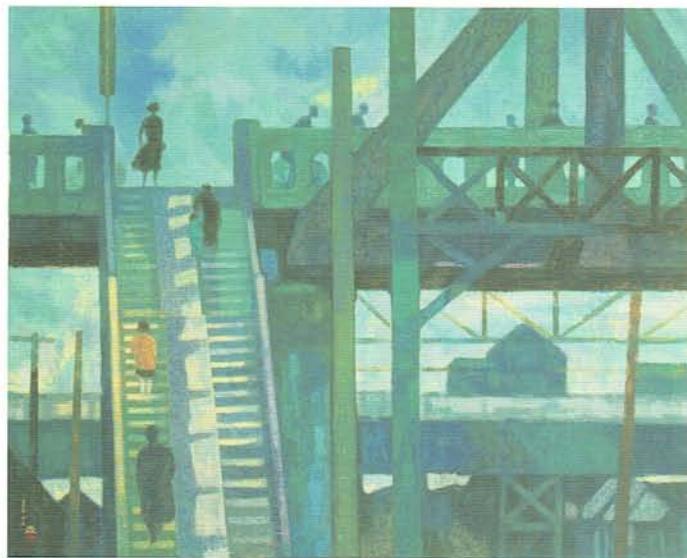
- ①はじめて 173人（59.7%）
- ②2～5回 95人（32.8%）
- ③6～10回 9人（3.0%）
- ④11回以上 2人（0.7%）
- ⑤回答なし 11人（3.8%）

収蔵品紹介

冬の日

伊東 隆雄 ITO Takao

1955(昭和30)年 紙本着彩 159.5×196.0cm 第11回日展出品



青味がかった色調で統一されたこの画は、豊橋駅に近い城海津の跨線橋を描いています。今でこそ車ばかりが行き交う跨線橋ですが、60年前はこの画のように人や自転車の往来の方が多かったのでしょうか。遠景にみえる三角屋根の建物は豊橋駅の駅舎です。画中の女性のように橋の上で足をとめれば、せわしく往来する駅の構内や街並みが一望できました。この跨線橋は豊橋の戦後復興期のシンボル的な存在として他の在郷の画家も描いています（平川敏夫の同主題作品も当館に収蔵）。

豊橋出身の伊東隆雄は中村岳陵の画塾に学び、活動当初は日展にたびたび入選を重ねた日本画家です。岳陵との縁は同郷の中村正義の入門（昭和21年）を端緒とし、以後当地方から若い画家たちがその門下に入りました。輪郭線を排し、厚く盛った色面で構成する画

風は、戦後の日本画家が好んだ様式ですが、画面全体を染め上げたようなくすんだ青や緑の諧調は、この時期の正義周囲の画家たちがしばしば用いています（ちなみに戦前から入門していた兄弟子の我妻碧宇と森緑翠の雅号には緑にちなんだ字がつけられ、画塾の名称も蒼野社という名でした）。

山間風景、夏の庭園、渓谷の泉、海辺の町、彼らの描いた主題はさまざまですが、その色彩は草木の緑、海や空の青などを映したものですが、伊東の《冬の日》はそうした自然の固有色ではなく、鉄とコンクリートの建造物が翳り始めた空や大気の色を帯び、深みを増していく様をとらえています。冬の日の冷たい空気を青い色彩に託し、階段にのびる西日と子供のセーターの黄色がわずかに温もりを添えています。

伊東は我妻碧宇・森緑翠・中村正義の蒼野社脱退を機に豊橋の日本画家達とともに同画塾を辞し、日展からも離れて白土会の結成に参加します。以後、白土会展を中心に当地方で活動しましたが、今年4月に87歳で逝去されました。

このたびの収蔵品展「Color Rooms」では色をテーマに各部屋を構成しており、この作品は我妻碧宇・永井繁男・森緑翠など蒼野社メンバーの作品とともに「アオ（青・緑）の部屋」に展示します。「アオ」という呼称が包括する色は青から緑まで実に豊かなバリエーションであることが、展示作品からもうかがえるでしょう。青、碧、蒼など、さまざまな名をもつ「アオ」の世界に身を置いてみてください。

（豊橋市美術博物館 主任学芸員 丸地加奈子）

◆収蔵品展「Color Rooms」(1/5~2/21)にて公開

編集後記

いつも編集会議を楽しんでいます。『風伯』は美術博物館のメインテーマを柱に、基本的なレイアウトは決まっていますが、シーズン毎に工夫しています。会員の交流も大切にしたいと考えています。

意見交換していると、次から次へと話題が出てきて編集委員の文化レベルの高さを感じます。新しい知識と出会うことは至福の時もあります。

私の主な役割は表紙絵の決定です。A4縦長に合う絵を探し出し、縦横の比率を合わせるためにトリミングしたり、デザイン・色彩的に面白い部分使いをしたりします。

これからも編集委員の皆さんと力を合わせて、会員の皆さんに楽しく読んでいただける『風伯』作りを目指します。
(高須博久)

[表紙作品]

武井武雄《おやゆびひめ》1965年 イルフ童画館蔵

◆「生誕120年 武井武雄の世界展

～こどもの国の魔法使い～にて公開中

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第93号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

編集長 高須博久(副会長)

編集委員 鈴木冷子 神野志保子 河邊満江 富田真知子
藤本逸子 清水貴裕

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成27年11月1日発行